

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊 25 年目
創刊 1989 年 Nr. 288

GEKKAN-WIEN 2013年6月号

ゴッホ「サン・ポール病院」
レオポルト美術館 特別展「雲」
7月1日まで

Vincent van Gogh 1853-1890
Hôpital Saint-Paul in Saint-Rémy-de-Provence, 1889
Paris, musée d'Orsay, Schenkung Max und Rosy Kaganovitch,





杉本純の原子力の話 II

ウィーンと京都 21



四月二八日に茨城県高萩市において、青年会議所主催の「考えようことも達の暮らすみらいの高萩」と題する講演会が開催された。福島原子力発電所事故により放出された放射性物質の影響により、近隣各県で発生した汚泥等の指定廃棄物（八千ベクレル以上／キロ）は、法律により国が責任を持つて処理することになっている。昨年

九月、環境省副大臣が高萩市に來庁し、茨城県で生じた指定廃棄物の最終処分候補地として高萩市の国有林野が選ばれたとの提示があった。寝耳に水の高萩市では、市議会や市民が国に撤回を申し入れるなどの反対をした結果、一月になって環境省は県や市町村との意見交換等を重視し、今後は手順を踏んで進めると説明し仕切り直しとなった。このような背景の下、福島原子力発電所事故の状況、放射線の人体への影響等について学ぶために本講演会が企画された。

筆者は福島原子力発電所事故の状況に関する講演を行い、国際医療福祉大学の北原教授からは放射線の人体への影響に関する講演があった。連休前半の中日にも関わらず、百名近くの市民が参加し、熱心に講演を聴き、質疑応答では時間を大幅に超過する位質問が続いた。公演後に青年会議所の案内で候補地を視察した。



途中の花貫溪谷では多くの人がバーベキューを楽しんでおり、候補地は立入禁止であったが、候補地に至る道のすぐ横を清冽な小川が流れていた。市民が安全確保や風評被害に懸念を持つのは十分理解できたが、適地を捜すとともに、専門家による十分な安全評価が一方で求められていると感じた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、皇帝の住居について述べてみたい。ウィーンの王宮は、一九一八年までハプスブルク家歴代皇帝の居城だった。もともとは中世に建てられた城で、長年にわたる同家の強大化と領土拡大に伴って拡張され、美しく飾られてきた。二六世紀にはアメリ王宮、一七世紀にはレオポルド宮、一八世紀には帝国宰相宮、一九世紀にはミヒャエル宮が加えられた。一九〇〇年頃、最後の造営計画として新王宮が建設されたが、これは壮大な王城を作り上げる総合計画の一部だった。しかし、この計画の完成を待たずに帝国はその終焉を迎えた。現在、王宮にはオーストリア大統領府

国際会議場、ウィーン少年合唱団がミサで歌う礼拝堂、スペイン乗馬学校などが入っている。

一方、平安遷都に起源する当時の御所は、現在の御所から約二㎞西に位置していた。現在の御所は内裏の焼失等の際の仮住まいである東洞院土御門殿に由来し、鎌倉時代に御所



と定められた。明治までの約五百年間歴代天皇が住居とした。建物はその間も焼失・再建を繰り返し、現在の建物は安政二年に平安時代の内裏にならって再建された。明治になって都が東京に移り、御所は公園として整備され市民へ開放され、散策等の場として親しまれている。苑内には百年を越える樹林が育ち、旧公家屋敷跡や庭園等歴史的遺構が点在し、京都でも特別な空間となっている。ウィーンの王宮は豪華絢爛であり、御所は簡素なのが大きく違うが、市民に愛されるところにも、観光に貢献しているのが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、シニイ博物館を含む王宮を何度か見学し、近くのフォルクスガルトン（庭園）を良く散策した。新王宮で開催された国際原子力機関主催の舞踏会に参加したこともある。御所も紫宸殿の見学や市民グラウンドでのソフトボールの練習や試合ばかりでなく、苑内を家内と良く散歩している。両市の宮城を満喫できた幸運に感謝しつつ、新王宮を描いたスケッチを掲載させていただく。

■杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■